

スイスの言語事情・スイスのフランス語・ロマンシュ語

平塚 徹

ここでは、まず、スイス全体の言語事情を概観した上で、スイスのフランス語とロマンシュ語について見ていく。スイスのドイツ語およびイタリア語については、それぞれ、ドイツ語専攻の島憲男先生とイタリア語専攻の内田健一先生にお話を願います。

スイスの言語事情

スイスはドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語の4言語を国語および公用語としている¹⁾。ドイツ語は国土の中央部のかなりの部分で使われ、話者数もスイスの人口の64.5%に相当し、圧倒的に多い。フランス語は西部において使われていて、話者数は22.6%で、ドイツ語よりはるかに少ない。イタリア語は南東部のティチーノ州およびグラウビュンデン州（イタリア語ではグリジョーニ州）の一部で使われていて、話者数は8.3%とさらに少ない。ロマンシュ語はグラウビュンデン州で使われているが、話者数は0.5%とごくわずかである²⁾。

このような母語話者数の違いにもかかわらず、スイスはこれらの4言語を国語および公用語として認めているが、そのことは例えばスイスの紙幣にこの4言語が等しく記されていることに如実に現れている（図1）。フランス語・イタリア語・ロマンシュ語が互いによく似ているのに対し、ドイツ語がかなり異なっているが、これは前者三言語が

1 スイス連邦憲法第4条はスイス連邦の国語をドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語と定めている。また、第70条第1項はドイツ語・フランス語・イタリア語を公用語とし、加えて、ロマンシュ語話者と意思疎通する場合にはロマンシュ語も連邦の公用語であるとしている。

2 <http://www.bfs.admin.ch/bfs/portal/en/index/themen/01/05/blank/key/sprachen.html>

ここで、「話者数」とは、当該言語を主に使用する人の数である。国語以外の言語を主に話す移民がいることなどにより、合計は100%にならない。

全てラテン語に由来するロマンス語であるのに対して、ドイツ語だけがゲルマン語であるからである。



図1 スイスの10フラン紙幣³⁾

紙幣の場合には4言語を記載するスペースがあるが、硬貨には、CONFEDERATIO HELVETICA、あるいはHELVETIAという記載しかない(図2および図3)。これはラテン語で、「スイス連邦」ないし「スイス」の意である。図3の10ラッペン硬貨には通貨単位が記されていないが、これはスイス・フランの補助単位「ラッペン」の略号が言語によって異なるので⁴⁾、やはり公平性のために省略していると思われる。

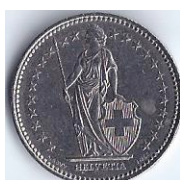


図2 スイスの1フラン硬貨



図3 スイスの10ラッペン硬貨

3 表にはフランス語とイタリア語で、裏にはドイツ語とロマンシュ語で、以下のように、「スイス銀行 10フラン」と書かれている。

フランス語 BANQUE NATIONALE SUISSE / Dix Francs
 イタリア語 BANCA NAZIONALE SVIZZERA / Dieci Franchi
 ドイツ語 SCHWEIZERISCHE NATIONALBANK / Zehn Franken
 ロマンシュ語 BANCA NAZIUNALA SVIZRA / Diesch Francs

4 スイス・フランの補助単位は、ドイツ語で「ラッペン (Rappen)」、フランス語で「サンチーム (centime)」、イタリア語で「チェンテージモ (centesimo)」、ロマンシュ語で「ラップ (rap)」であり、共通の略号を作ることができない。

HELVETIA の表記は切手にも使われている。国際標準化機構の国名コード ISO 3166-1 では、スイスは2文字によるコードで CH、3文字によるコードで CHE となっているが、これも *Confederatio Helvetica* の略である。このため、スイスのサイトはアドレスが「.ch」で終わっているのである。このように、1言語しか使えない場合には、4言語の平等性を維持するために、ヨーロッパのかつての共通語だったラテン語を用いているのである。

ところで、2014年は、ヨーロッパでの分離独立運動のニュースが目立った。先ず、9月18日にはスコットランドでイギリスからの分離独立を問う住民投票が行われた。反対派が勝利したものの、分離独立を求める声が強いことが分かった。その後、今度はスペインのカタルーニャ自治州が分離独立を問う住民投票を行おうとしたが、中央政府が憲法裁判所に訴えて阻止したのに対して、自治州側が意見調査という名目で非公式の投票を行うということがあった。スコットランドの住民投票についてカタルーニャでの投票があり、ヨーロッパで分離独立運動が盛んになっているとの印象が深まったが、以前より対立が非常に深刻なものとしてベルギーのフランデレン地域の分離独立運動がある。ベルギーは、南部がフランス語圏、北部がオランダ語圏だが⁵⁾、後者にあたるフランデレン地域の分離独立運動は、「言語戦争」と呼ばれるほど熾烈なものとなっている。これは、言語圏の対立であるが、スペインからの分離独立運動が起きているカタルーニャもカタルーニャ語圏であるし、イギリスからの分離独立を問う住民投票をしたスコットランドもかなり英語化しているとはいえ、もともとはスコットランド・ゲール語が使われていて、今でも特にヘブリディーズ諸島やスコットランド西海岸において話されている。このように見えてくると、多言語国家の維持はなかなか困難なものであるように思われてくる。しかし、四つも国語および公用語を有する多言語国家スイスについては、ここまで深刻な国家分裂の危機の話は聞かない。これはなぜだろうか。

すぐ思いつくことは、イギリス、スペイン、ベルギーが EU 加盟国であるのに対して、スイスはそうでないことである。分離独立をするということは、新たに国家を一つ建設するということだが、これはかなり大変なことであるはずだ。しかし、スコットランド、

5 首都のブリュッセルはオランダ語圏の中にあるが、オランダ語とフランス語の両方が使われている。また、フランス語圏の東部にドイツ語圏もある。

カタルーニャ、フランデレン地域については、分離独立後もそのまま EU に留まれば、国家運営の一部は EU が肩代わりしてくれることが期待できる。また、EU がある状況では中央政府はむしろ余計なものにさえなってくる。よって EU が分離独立運動を盛んにする要因になっていると考えることができるが、これはスイスには当てはまらないのである。

しかし、このような説明はかなり表面的なものではないかと思われる。というのは、分離独立運動の問題は、国家の歴史的な成り立ちに端を発していると考えられるからである。スコットランドがイギリスの一部になっているのは、王位継承の結果によりスコットランドとイングランドが同君連合となり、その後、グレートブリテン連合王国となったからである。しかし、王国の中心はイングランドにあり、スコットランドには不公平感がある。カタルーニャがスペインの一部になっているのは、カタルーニャ・アラゴン王家とカスティーリャ王家の婚姻と王位継承の結果である。このようにしてできたスペイン王国においては、カスティーリャが中心となり、カタルーニャは一地方となっていた。現在では、カタルーニャ自治州としてスペイン語とともにカタルーニャ語を公用語とするに至っているが、スペインの中で独自のアイデンティティを持ち、ナショナリズムが強い。ベルギーは 1830 年にオランダから独立したが、その経緯からフランス語を唯一の公用語としていた。しかし、オランダ語圏の不満が高まっていき、地域毎にオランダ語、フランス語、ドイツ語を使用することになった。そして、連邦制へと移行したが、オランダ語圏とフランス語圏の対立は続いている。

スイスのなりたちは、イギリス・スペイン・ベルギーのこのような成り立ちとはかなり異なっていると言える。そもそも、スイスは、ウーリ・シュヴィーツ・ウンターヴァルデンの原初三州が 1291 年結んだ永久同盟にさかのぼるとされている。その後、数世紀に亘って少しずつ同盟する州が増えて次第に現代のスイスへと拡大していくのである。その過程は非常にゆっくりとしており、独立性の高い 26 の州からなる極めて分権的な連邦国家を作り上げてきた。このことが、他言語国家スイスが分離独立の危機に至らずに存続している大きな理由であろう。

スイスのフランス語

今回、スイスのフランス語について話すということでかなり困った。というのも、スイスのフランス語はフランスのフランス語とさして変わらないからだ。もちろん、それなりに違いはあるが、それは語彙レベルに集中している⁶⁾。面白い話もあるが、その面白さはフランス語を知っていることが前提になる⁷⁾。何とかその面白さが伝わるように工夫しようとしたが、なかなか難しい。

スイスのフランス語のこのような状況は、スイスのドイツ語と比べると極めて対照的である。スイスのドイツ語圏では、人々の母語はスイス・ドイツ語であり、標準ドイツ語は学校で習うのである。また、家族や友人とはスイス・ドイツ語で話すのだが、読み

6 スイスのフランス語の語彙を集めたものとして、次の文献を挙げておきたい。

Georges Arès (1994) *Parler suisse, parler français*, Vevey: Éditions de l'Aire.

7 スイスのフランス語の特徴としてもっともよく言及されるのが、数詞である。標準フランス語では 70、80、90 が二十進法による言い方になっているのに対して、スイスのフランス語では本来の古い言い方が残っている(ただし、*huitante* は、もともとは、*octante* であった (*Dictionnaire historique de la langue française* (1998) Paris: Le Robert, s.v. *octante*))。

| | 標準フランス語 | スイスのフランス語 |
|----|-----------------------------------|-----------------|
| 70 | <i>soixante-dix</i> (60+10) | <i>septante</i> |
| 80 | <i>quatre-vingt</i> (4×20) | <i>huitante</i> |
| 90 | <i>quatre-vingt-dix</i> (4×20+10) | <i>nonante</i> |

しかし、これはスイスに限ったことではない。*septante* と *nonante* はベルギーにおいても残っている。また、*septante* はフランス東部にも残っている (*Dictionnaire historique de la langue française* (1998) Paris: Le Robert, s.v. *septante*)。

次によく言及されるのが、食事の言い方であり、標準フランス語とはひとつずつずれている。

| | 標準フランス語 | スイスのフランス語 |
|----|-----------------------|-----------------|
| 朝食 | <i>petit-déjeuner</i> | <i>déjeuner</i> |
| 昼食 | <i>déjeuner</i> | <i>dîner</i> |
| 夕食 | <i>dîner</i> | <i>souper</i> |

標準フランス語においては *déjeuner* が「朝食」から「昼食」に、*dîner* が「昼食」から「夕食」になったのに対して、スイスでは以前の状態のままなのである。しかし、これもベルギーやケベック (カナダ) のフランス語でも同じであるし、実は、フランス国内でも多くの地方でそうである (Pierre Rézeau (ed.) (2001) *Dictionnaire des régionalismes de France : géographie et histoire d'un patrimoine linguistique*, Bruxelles: Duculot, s.vv. *dîner, souper*)。

これらの例は、スイスのフランス語の特徴とされるものが、実は、必ずしもスイスのフランス語に固有のものとは限らないことを示している。

書きは標準ドイツ語で行う⁸⁾。私的な場面での会話には母語が使われるのに対して、公的な場面では教育によって習得される正式な言語が使われるという状況は必ずしも珍しいものではなく、これを社会言語学者ファーガソンは「ダイグロシア」と名付けた。スイスのドイツ語圏は、ファーガソンが挙げたダイグロシアの代表的な四例のひとつである⁹⁾。

スイスのドイツ語はドイツのドイツ語と乖離しているのだが、これに対して、スイスのフランス語はフランスのフランス語とあまり異なっていないのである。そこで、ここでは発想を変えて、スイスのフランス語がフランスのフランス語とそれほど異なっていないのはそもそもなぜなのかということを考えることにした。

さて、確かに現在においてはスイスのフランス語はフランスのフランス語と大して変わらないのだが、元からこうだったわけではない。かつては、フランスにおいてさえも、地域によって異なる言語が話されていたのである。中世においては、フランスの北部ではオイル語が、南部ではオック語が、東部中央ではフランコ・プロヴァンス語が話されていた。さらには、北西部のブルターニュ地方ではブルトン語が、南西部のバスク地方ではバスク語が、南部の北カタルーニャ地方ではカタルーニャ語が、北部のフランス領フランドル地方ではフラマン語が話されていた。フランス北部のオイル語が現代のフランス語の元なのだが、それも一様ではなく、地域によって様々な方言が存在した。そして、現代のスイスのフランス語圏はといえば、かなりの部分でフランコ・プロヴァンス語（アルピタン語）が話されていたのである¹⁰⁾。

しかし、現代のフランスにおいては、地方に少数言語が残っているが、全国どこでも標準フランス語が話されているのである¹¹⁾。そして、スイスのフランス語圏でも標準フランス語とあまり変わらないフランス語が話されているのである。なぜ、このようになったのであろうか。スイスは一旦置いて、まずはフランスについて見てみる。

8 スイスにおけるスイス・ドイツ語と標準ドイツ語の使用域の詳細については、本論集所収の島憲男「スイスのドイツ語 (Schweizerdeutsch)」を参照されたい。

9 Ferguson, Charles A. (1964) "Diglossia", in Dell Hymes (ed.) *Language in Culture and Society*, New York: Harper & Row, pp.429-439.

10 例外はジュラ州で、オイル語のフランシュ・コンテ方言が話されていた。

11 ただし、フランス国内のフランス語に地理的変異がないわけではない。例えば、注7を参照されたい。

フランスという国は、百年戦争（1339-1435）によりイングランドの勢力を国内から排除して成立したと言える。この戦争の結果、封建貴族が弱体化し、国王による中央集権化が進んでいく。そして、司法や行政においてラテン語に代えてフランス語を使うように定めたヴィレル＝コトレの勅令が1539年にフランソワ一世によって発せられる¹²⁾。これは、司法言語・行政言語をラテン語からフランス語に代えることを意図していたのだが、それと同時にフランスのあらゆる地域言語も排除することにもなった。これ以降、フランス語はフランスの国語へととなっていく。その後、絶対王政とともに中央集権化が更に進んでいくが、1789年のフランス革命により王政が終わる。そして、フランスは同質な国民からなる「国民国家」（ネイション・ステイト）へととなっていくのである。国民が同質であるということは、同じ一つの文化、歴史、そして言語を共有するということである。現実には、フランスには様々な地域言語が存在していたのだが、それを駆逐するようにフランス語を浸透させていったのである。こうして、フランスは「国民国家」のモデルになっていくのであるが、これはまさしくスイスとは全く異なった国家のあり方である。今回のシンポジウムの冒頭の挨拶で、スイス大使館文化・広報部長ペレス氏は、「スイスは本当には『ネイション』ではない」と仰っていたが¹³⁾、まさしくスイスは四つの異なる言語圏からなっており、フランスをモデルとする「国民国家」（ネイション・ステイト）とは正反対の国なのである。政治や行政に関しても、スイスは独立性の高い26の州からなる極めて分権的な連邦制国家であるのに対して、フランスは反対に中央集権国家の代表例なのである。フランスはフランス語を全国民に浸透させていきながら、次第に地域言語を駆逐していった。現在でも地域言語は少数言語として残っており、近年は見直されてきている。しかし、フランスは、欧州地域少数言語憲章に署名はしているものの、共和国の言語はフランス語であると定めるフランス共和国憲法第2条に反するとして¹⁴⁾、批准していない。これは、フランスの地域言語に対する態度

12 2015年1月、パリで起きたシャルリ・エブド襲撃事件の容疑者が、逃亡中にヴィレル＝コトレのガソリンスタンドで食料品を奪うという事件があった。日本の多くの新聞は「ビレコトレ」と表記していたが、これはヴィレル＝コトレの勅令が発せられたヴィレル＝コトレである。

13 原文は *La Suisse n'est pas vraiment une « nation »* である。和訳では「スイスは一致した一つの国ではなく」と訳されている箇所である。

14 ただし、第75条の1では、地域言語はフランスの遺産に属すると定めている。

を如実に示している。

他方、フランス語はフランスの隆盛とともに国外においてより一層の発展を遂げる。中世においてはラテン語が国際語であったが、フランス語がそれにとって代わるのである。これとともに、フランス語はヨーロッパの知識階級や上流階級に浸透していく。今回、そのことを示す例として、イタリア語専攻・小林教授が「ヨーロッパの文学」で取り上げたと聞いたので、トルストイの『戦争と平和』を挙げる。このロシアの文豪の小説はロシア語とフランス語で書かれている。特に会話文においてフランス語が使われている。というのは、当時のロシア貴族はフランス語を常用していたからである。

以上のような背景的事情の中で、フランス東部中央やスイス西部で話されていたフランコ・プロヴァンス語も次第にフランス語にとって代わられていったのである。その結果、フランコ・プロヴァンス語は危機言語となっており、ユネスコによると消滅危険度は「危険」である¹⁵⁾。スイス西部においてフランス語が使用されるようになっていくには、もっと細かい経緯もあるのだが、大局的に見れば、上述のよう状況が背景的要因として大きかったと考えられる。

以上、スイスのフランス語がフランスのフランス語と余り異ならないのはなぜかということを考えてきたが、最後に、このことが多言語国家スイスにとってどのような意味を持っているかについて述べておきたい。スイスは、ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語の4言語を国語および公用語としているが、各言語の話者数には著しい不均衡が見られる。ドイツ語話者は、スイスの人口のほぼ3分の2に相当し、圧倒的に多い。それに比べると、フランス語話者数はドイツ語話者数の約3分の1程度である。イタリア語話者は更に少なく、ロマンシュ語話者に至っては極わずかである。つまり、ドイツ語話者が他の言語の話者に比べて圧倒的多数派なのである。普通に考えると、ドイツ語の一人勝ちになってもよさそうな状況である。しかし、先に述べたように、スイスのドイツ語圏においては、人々の母語は標準ドイツ語とはかなり異なったスイス・ド

15 <http://www.unesco.org/languages-atlas/>

ちなみに、注10で言及したフランシュ・コンテ方言の消滅危険度は「重大な危険 (severely endangered)」である。

イツ語であり、標準ドイツ語は学校で習うのである。つまり、彼らの母語はドイツに繋がっていない。これに対して、スイスのフランス語話者は母語がそのままフランス語圏に繋がっているのである。このことは、スイスにおけるドイツ語話者数とフランス語話者数の不均衡を帳消しにして、両言語の間に微妙なバランスをもたらしているのである。つまり、ドイツ語の一人勝ちを妨げていると言えるのである。これは、さらなる少数派のイタリア語やロマンシュ語が尊重されているのにも寄与している。よって、スイスが4言語を国語および公用語とする多言語国家としてあることの要因の1つにすらなっていると考えられるのである。

ロマンシュ語

ロマンシュ語は、イタリア語・スペイン語・フランス語・ポルトガル語などと同じくラテン語に由来するロマンス諸語のひとつである。スイスのグラウビュンデン州の限られた地域でのみ使用されていて、ゲルマン語派のドイツ語に大きく影響されていて興味深い言語である。

スイスは、このロマンシュ語をドイツ語・フランス語・イタリア語と並ぶ国語および公用語としているが、話者数はスイスの人口のわずか0.5%に過ぎない。しかも、移民の言語も含めると、ロマンシュ語の話者数は10位に過ぎない¹⁶⁾。しかし、ロマンシュ語は国外では話されておらず、その意味でスイス固有の言語であると言える。スイスがロマンシュ語を国語および公用語のひとつと認めるに至ったのも、連邦制国家としてそれぞれの言語を尊重しようとしていることはもとより、ロマンシュ語がスイス固有の言語であると認識してのことである¹⁷⁾。

ロマンシュ語は、北イタリアのフリウリ語やドロミテ語とともにレト・ロマンス語群

16 <http://www.bfs.admin.ch/bfs/portal/en/index/themen/01/05/blank/key/sprachen.html>

17 ティチーノ州やグラウビュンデン州にはロンバルド語という方言群もあるが、これには国語や公用語の地位は認められていない。このことは、この方言群がイタリアのロンバルディア州にも存在しており、スイス固有の言語と見なされなかったことも理由になっていると思われる。なお、ロンバルド語話者が書き言葉にはイタリア語を用いていることもロンバルド語に公的な地位が認められない理由になっていると思われる。これは、スイスのドイツ語圏における標準ドイツ語とスイス・ドイツ語の関係と平行的であり、ダイグロシアの状態にあると考えられる。

に属するとされている。しかし、これらの言語が共有している特徴は少なく、むしろ北イタリアの諸方言との結びつきの方が強いという反論もある。このような反論は、ロマンシュ語をイタリアの方言のひとつとして位置付け、ロマンシュ語圏をイタリアに併合すべきだという考えにつながるものである¹⁸⁾。スイス国民がロマンシュ語を国語と認めただのには、このような考えに対して、スイスの国土を守ろうとする意図も働いていた。

しかし、必ずしもロマンシュ語という単一の言語が存在しているわけではない。というのは、地域によって異なる方言が話されているからである¹⁹⁾。ロマンシュ語の存続には標準語が必要との認識から、ロマンチュ・グリシュンという標準語が作られたが、それぞれの方言話者には違和感があり、強い反発もある。

ロマンシュ語は、グラウビュンデン州の複数の自治体において公用語とされており、また、小学校で教えられている。メディアでもロマンシュ語は用いられていて、La Quotidiana というロマンシュ語日刊紙が発行され、ドイツ語紙 Engadiner Post もロマンシュ語ページを設けている。スイス国営放送局内には Radiotelevisiun Rumantscha というロマンス語放送局があり、ドイツ語放送局の Radio Engiadina もロマンシュ語放送を行っている。

少数言語研究団体により運営されているウェブサイト「エスノログ」では²⁰⁾、各言語の地位を EGIDS (Expanded Graded Intergenerational Disruption Scale) を用いて評価している。この尺度は、言語の世代間継承への障害の大きさを 13 段階で表すものである。これによれば、ロマンシュ語の評価はレベル 4 という少数言語にしては高い評価である。標準語が作られていること、小学校で教えられていること、行政やメディアでも使用されていることからこの評価になるものと思われる²¹⁾。

しかしながら、ロマンシュ語の存続が保証されているかという点、そうでもない。世

18 Ricarda Liver (1999) *Rätoromanisch : Eine Einführung in das Bündnerromanische*, Tübingen: Gunter Narr, pp.16-17

19 グラウビュンデン州の西から東に向かって、スルシルヴァ方言・ストシルヴァ方言・スルミラン方言・ピュテール方言・ヴァラデル方言が存在している。

20 <http://www.ethnologue.com>

21 ちなみに、公的な地位のないスイス・ドイツ語はレベル 5 という評価である。ロマンシュ語よりはるかに話者が多いにもかかわらず、その地位はより低いとされているのである。

界の言語の半数は 22 世紀の初めまでに消滅すると予想されており、ユネスコは言語の消滅危険度を「脆弱・危険・重大な危機・極めて深刻・消滅」の 5 段階で評価しているが、ロマンシュ語の消滅危険度は「危険」である。これは、子供がその言語をもはや家庭で母語として習得していないという状態である²²⁾。なぜ、このようになってしまうのであろうか。確かにロマンシュ語は小学校で教えられている。しかし、ほとんどはドイツ語の方が流暢になるのである。そのため、家庭での母語としての習得が望めないということであろう²³⁾。このような危機的な状況に対して、スイス連邦やグラウビュンデン州の言語政策がどのような成果を出せるのか、注目していきたい。

22 <http://www.unesco.org/languages-atlas/>

ちなみに、スイス・ドイツ語の消滅危険度は「脆弱」である。これは、多くの子供が話すが、使用域が限られているという状態である。

23 Tapani Salminen (2007) "Europe and North Asia," in Christopher Moseley (ed.) *Encyclopedia of the world's endangered languages*, London & New York: Routledge, pp.211–280.